

ビル灯りもまばらになったオフィス街を満身創痍で歩く。

身体中がぐったりとしていて、コツコツとコンクリートを鳴らすハイヒールの音まで頼りなく聞こえた。

(つ、疲れたあ……)

八時を過ぎたタイミングで新規の営業に行かされたのはさすがにキツかった。営業相手が美容院だったので、今日の閉店後なら来ていいよと促されたらしい。テレアポからの引き継ぎでは、求人の緊急度も高く熱いアポだという話だったが、実際に行ってみるとただの冷やかしでセクハラまがいのおじさん店長だった。

——キミが担当になってくれるなら、契約も考えるけどなあ。

お尻に手を回されたことを思い出してぞわりと震える。ああいうときにぴしやりと言えないのが情けない。

(私も、憂理みたいに強くなれたらいいのに)

一条憂理。私が推しているメンズアイドルだ。ラビリンズというグループで活動しており、サイリウムカラーは青。ドSを自称していて、実際にチェキや握手会でも塩対応なのだが、とにかくクールビューティで顔が良い。推し始めて三年も経てば、塩対応もご褒美みたいなものだ。

——なんだ、お前かよ。

一昨日のズームおしゃべり会のことを思い出して、ニヤニヤと口元が緩む。グッズの特典で五分間マンツーマンのトークタイムがあつたのだが、入室直後にため息を吐かれた。

「お前、最近現場来ねえじゃん。忙しいの？」

唇を尖らせて、咎めるような口調で睨みつけられる。「えっ、心配してくれてるの？」とはしゃげば「違ーよ、金づるいないの困る」と罵られた。

憂理はオタクたちのことを金づると呼んでいる。そんなところも好きだ。

「社畜だから許してよ」

「いつつも社畜だからって言うけど、お前、俺より仕事が大事なわけ？」

憂理はぶつぶつと文句を言うが、たぶん心配してくれている（と思ひ込んでゐる）。

「そんなわけないじゃん！ いっぱい稼いでいっぱい貢ぐから！」

と宣言したところでスタツフに止められてズームおしゃべり会は終わった。五分間はあつという間である。

スマホ画面に映る憂理もかつこよかった。もちろんスクショしまくった。少しウェーブのかかった黒髪に、左右ひとつずつのシルバーピアス。垂れ目で薄いグレーの瞳。

ラビリンスの衣装は王子様チックなテイストも多いが、憂理の私服はジャージを着こなすようなカジュアル系だ。SNSに載っている自撮りを見ると、オシヤ

レにうとい私でもセンスがいいのが分かる。

憂理のことを思い出していたら、コンクリートを踏むヒールの音も軽くなってきたような気がする。どうせ終電がないので、二駅分、歩いて帰らなければならぬ。

私の勤める業界は三月から四月にかけてが繁忙期だった。ここ二ヶ月はほとんど休みなく働いており、まさに社畜そのものの生活をしていた。

だから一昨日は、本当に久しぶりに推しを撮取したのだ。仕事終わりの夜、ほんの一時だけだったが、ものすごく幸せだった。画面越しでも分かる尊さを噛みしめながら、今度は生で同じ空気を吸いたくてたまらなくなった。憂理にも小言を言われたことだし、次のライブの日は絶対に定時であがって参戦すると決意している。

（推しは生きる糧！ オタクで良かった！）

肩からずり落ちそうになったショルダーバッグをかけなおし、早足で角を曲がる。もう少しで家に着くというところで、コンビニに寄った。明日は久しぶりの休みなので、たまには晩酌でもしようかと考えたのだ。

ドリンクコーナーでレモンチューハイを手に取り、乾物を吟味する。イカそうめんと柿ピーに決めてレジに向かおうとしたところで、ドン、と男性がぶつかってきた。

「オイ、痛エんだけど」

絡んできた赤ら顔の中年は、見るからに酔っ払っている。「すみません」と謝って通り過ぎようとしたが、強い力で腕を引っ張られた。

「痛……っ」

「慰謝料払ってもらわねーとなあ、ハハ、おねーちゃん可愛いから身体で払ってくれてもいいよ」

おじさんはへらへら笑っているが腕を掴む力は男性そのもので、抵抗するのも怖い。レジに目をやっても店員はバックヤードに引っ込んでしまっているようだ。もう一度「すみません」と謝ったが、声が小さすぎて届いたかどうか分からない。どうしよう、どうしよう。パニックになりかけていると、後ろから声がかかった。

「おっさん、それ以上やったら警察呼ぶよ」

涙目で振り向けば、黒いキャップを被って黒マスクをした若い男性が目に入る。その姿勢好と、凜とした声に聞き覚えがあった。

……え？

中年男は声をかけられると思っていなかったのか、焦って大声を出した。

「ハア？ 急に出てきてなんだお前」

「店員さん、すみませーん」

黒マスクの彼は、冷静にバックヤードへ声をかける。外国人の店員が二人、なんだなんだと出てきたので中年男は舌打ちをして去って行った。

掴まれていた腕がじんじんと痛む。しかし私はおじさんに絡まれたことなんて、もはやどうでも良かった。マスクの男性が現れた時点から頭が回っていない。

だって、目の前にいるのは、どう見ても彼だ。ついさつきまで彼のことを考えていた私が見間違えるわけがない。

「ゆ、ゆ、ゆ——」

「しー」

彼が人差し指を立てて口元に当てたので慌てて口をつぐむ。

「家まで送るわ。会計してこいよ」

私がレジで決済している間も、すらりとした長身をジャージに包んで後ろに立っている。夢なんじゃないかと思いつつも何度か振り返ると、くすくす笑われた。

え、何その笑顔、知らないんですけど。ていうか家まで送るって何？

コンビニを出た瞬間、

「憂理だよね……!？」

と小声で尋ねると、彼はマスクを少しだけ下げて片眉をあげた。

「普段ならあんな無視すんだけど。よく見たらお前だったから」

「え、あ、あ……」

推しが私を助けてくれた。その事実言葉に言葉を失ってしまう。

こんな面倒な状況、無視する方がずっと憂理っぽいのに、私だったから助けたなんてとんだ殺し文句だ。

何も言えないでいると、憂理はマスクを戻して「家どっち？」と聞いてきた。本当に送ってくれるらしい。

「あの……いいです、ここで」

「なんで敬語？ 危ないから送るって。ああいうの待ち伏せとかしてたら怖いし」

「いや、ほんと、近いですし」

手をぶんぶん顔の前で振ると、憂理は不服そうに言った。

「俺に家知られたくない？」

「へっ!? そんな、そういう意味じゃなくて、もちろん大歓迎ですけども」

「大歓迎」

ふはっと声を出して吹き出した笑顔は、オタク向けじゃなくてメンバー向けのやつだった。しかも、憂理はサイリウムカラー緑と黄色のメンバーには塩なので、赤とか仲良いメンバーと話しているときの笑顔だ。ギョんツと胸が締めつけられて、呼吸が浅くなる。

何コレ、ホント、夢？

「俺も最近この辺に引っ越してきたんだよね」

「ひえっ！　そういうの、オタクに言わない方がいいんじゃない？」

「お前だし大丈夫だろ。友達いないじゃん」

（確かにライブはいつもぼっち参戦だけど！）

普通ならオタクが知り得ない情報まで聞いてしまい眩暈がする。本当に推しとプライベートで会ってしまった。

「ていうか、レモンチューハイと柿ピーって、おっさんかよ」

「ふ、普段はこんなじゃないんです！」

「敬語キモいから止めて。いつも通り話せ」

「えっと……う、うん」

「お前、現場のイメージと変わんねえな」

隣を歩く憂理は機嫌がよさそうだった。身綺麗にして参戦しているつもりだったのに、私は普段から柿ピーのイメージなのだろうか。なんとなくしょんぼりし

ていると、憂理が顔を覗き込んできて、またくすくす笑う。

（近っ！）

だから何その笑顔。知らない推しの一面に動揺しっぱなしだ。社畜期間を乗り越えた私に神様からのご褒美だろうか。

夢のような時間をいつまでも享受していたかったけれど、二人で歩いていると一瞬でアパートに着いてしまった。

「このアパートだから。送ってくれてありがとう」

「ふうん。綺麗なところ住んでんじゃん」

解散のつもりで手を振ったのだが、憂理はエントランスまで着いてきた。戸惑いつつオートロックを開けると自動ドアの中にも入ってくる。

「あの……？」

ついに一緒にエレベーターを待ち始めたので首をかしげたが、憂理はしれつと

していた。

「何号室に住んでるのか知りたいし」

一体それは憂理にとつて何の得があるのだろうか。何も分からなかったが、オタクとして推しの言うことは絶対だ。

「605だよ」

と答えているとエレベーターが到着した。二人で乗り込んだ瞬間、突然距離が近づいて憂理が私を壁に押し付ける。トン、と顔の横に拳が来て、いわゆる壁ドンの姿勢だ。

「へっ？」

「お前こんなガード緩くて大丈夫？ 俺も男なんだけど」

間拔けな声を出した私に、ため息が降ってくる。男なんだけどって、そんなこと私は百も承知だけど、逆に憂理は私のことを女として見るんでしょうか!?

健全なアイドルとオタクの関係だったはずなのに、一気に空気が湿って、心臓がバクバクと大きな音を立てた。憂理が至近距離でマスクを外してささやく。

「二ヶ月くらい現場来てなかっただろ？ ……一昨日、久しぶりにお前と喋れて嬉しかった」

「ひあっ!？」

う、嬉しかった？ 憂理にこんなことを言われたのは初めてだ。混乱して口をパクパク開閉していると、にんまりと憂理の口角が上がった。

「俺、お前のことオタクの中で一番気に入ってんの。初めて会ったときから、一番オキニだから」

何コレ、私死んだ？ 走馬灯でも見ているのだろうか。固まっている私の唇に、憂理の唇が重なる。ちゅ、と甘い音を聞きながらも、何をされているのか全く分からなかった。

エレベーターが六階に着きドアが開くと、憂理が私の手を引く。するりと指を絡ませられ、恋人つなぎをされた手の甲をぼんやりと眺め、ようやく思考が追いついてきた。

（キスされた……？ ていうか、手、つながれて……？）

「し、死ぬ」

思わず呟いてよろめいたところを、原因の推しに支えられて気を失いそうになる。白目になりかけた私を憂理がぎゅつと引き寄せた。

「こんなんで死ぬの？ これからもつとエッチなことするのに」

「え……？」

絶句だ。呆然としていると、いつの間にか605号室に着いていて、憂理が

「キーは？」と要求してくる。カードキーをかざし、部屋に入りかけて——はたと気がついた。

「ちょ、待って、だめ、入らないで、憂理」

「やだ」

「違、いいんだけど（いや良くないけど）とりあえず一分待つて！」

最近忙しかったので部屋がぐちゃぐちゃだ。とても推しを招けるような状態ではない。不服そうな憂理を玄関で待たせて、とりあえず散らかった洋服をクロゼットに押し込んだ。一人暮らしのワンルームなので、玄関を開けばベッドが見えてしまう。

（エッチなことつて、本気……？）

混乱したままとりあえずシーツを整えた。カーペットにコロコロをかけていると、痺れを切らしたのか憂理が玄関から覗き込んでくる。

「まだ？ 遅すぎ」

スーツ姿のまま床にはいつくばる私が面白かったのか、憂理はまた笑った。

アイドルの仕事ではあんなに塩対応なのに、プライベートだとこんなにコロコロ笑うんだ。キスされたことが脳内に蘇り、胸がぎゅんと高鳴る。

「どうせ部屋の掃除してんだろ？ 別にいいから」

憂理は「あがるよ」と有無を言わずに靴を脱いだ。

（お、推しが家に入って来た……！）

呆然としていると、彼は私を立たせて抱きしめる。ふわりと憂理の香水の香りがして、チェキを撮ったときのことを思い出した。

——お前、何枚撮んだよ。もう周回すんな。

あの嫌そうな顔をしていた憂理が、優しげに私を覗き込む。

本当に同一人物？ と今さら疑いたくなるほどアイドルの憂理と表情が違った。何というか、愛おしいという言葉が似合う。

「俺がいるのに考えごと？」

「ごめん、憂理のこと考えてた」

「俺の前で？」

憂理は眉を寄せて、ぼそりと呟いた。不服そうというより、悲しそうというか寂しそうというか、捨てられた犬みたいなしょんぼりした表情だった。

「……アイドルじゃない俺は嫌い？」

「えっ!？」

想像と全く違う言葉が降ってきて驚く。憂理は俯いたまま、か細い声で続ける。
「いつもと違って幻滅した？」

「いやいやいやいや！」

新鮮な表情が見れて嬉しさはあれど幻滅なんてありえない。ぶんぶんと首を横に振ると気持ち伝わったのか、憂理は安堵の表情をした。

「良かった。俺プライベートでお前に会えたからちよつと浮かれてて。お前に嫌

われたら悲しいし」

そ……そんな健気なこと言ってくれるんですか？ プライベート仕様の憂理、ヤバイ。

ぎゅ、と背中に回った手に力を込められて、私も恐る恐る手を伸ばす。

推しを抱きしめてしまった。超いいにおいがする。心臓がうるさすぎてしんどい。口を真一文字に引き結んでいると、憂理がささやくように言った。

「抱いていい？」

ストレートな言葉に、どくと心臓が大きく鳴る。憂理に抱かれるなんて考えたこともなかった。だって彼はアイドルで私はオタクだ。手の届かない存在だったはずなのに。

ここで、ダメって言えるのがオタクの鑑なのかもしれない。でもイエスカノーかなんて聞かれなくても決まっている。こんなに甘い言葉をささやいてくれる推

しの誘いを断れるわけではない。

意を決して、こくり、と小さく頷くと、憂理は嬉しそうに目を細めた。

「エッチすんのはじめて？」

今度は小さく首を横に振る。経験がないわけではない。だから今から、憂理が
どういうことをするつもりなのかは分かる。

憂理は私が否定したことが気に入らなかつたらしく、思い切り顔をしかめた。

「は？ 誰かに抱かれたことあんの？ ムカつく」

この陰しい表情はいつものやつだ。なんだか安心する。ちよつとニヤけた私を
憂理が覗き込んでくる。

「それって俺を推し始めたあと？」

「え？ えー……えつと……」

深掘りされるとは思っていなかったので動揺する。彼氏がいたのは大学生の頃

だ。憂理を推し始めたのは社会人になってから。そう説明しようとしたが、口を開きかけた私に、

「やつぱりいい」

と憂理は噛みつくようにキスを落としてきた。少し苛立ちを感じる、唇を食べられるような口づけ。下唇を甘噛みされて喉が鳴ってしまう。

「ん……っ」

推しが本気で私を抱こうとしている。信じられない状況に夢見心地だった。キスをしているだけでぞくぞくとした感覚が身体を巡る。

（遊ばれるだけだとしても、最高の思い出で……）

グレーの瞳と間近で視線が絡む。私は言葉どおり今この瞬間に死んでもいいという気持ちで、目を閉じた。

*

推しと密着しているだけで卒倒しそうなので、正直すぐに挿入して終わりで良かった。エッチなんて男の人が気持ちよければいい。というか今まで気持ちよかったことがないので、夢中になっている自分なんて想像できなかった。

そう思っていたのに憂理にベッドの上で押し倒されながら、私はこれまでにないほど息を荒げていた。

「ハア、やつ……♡ も……っ♡ んう」

私だけ下着にされて、憂理はまだ一枚も服を脱いでいない。ゆっくり全身の肌を撫でられながらキスしているだけなのに、身体中が疼いて仕方がない。

舌と舌を腔内でぬるぬると擦り合わせると溶けそうなほど気持ちいい。憂理の分厚い舌は甘い気がする。唾液が流れ込んでくるたびに必死で飲み下しながら、

推しの細胞を身体に取り入れている事実にくらくらした。

「んうゝ……ふ……っ♡」

憂理の舌が歯列をなぞり、唇の裏をねっとり舐める。口の中全部が性感帯になったみたいだった。

ちゅ♡れろ♡という唇から立つ甘い音にもうつとりしてしまう。

口だけではない。彼の大きな手が脇腹や背中をまさぐっていて、それだけで下半身に熱が集まった。まだ性器には全く触られていないのにショーツの下がぐちよぐちよに濡れているのが自分で分かる。

推しの手指がこんなに優しいなんて信じられない。まるで宝物を触るみたいに優しく、フェザータッチで肌を滑る指に、ぞくぞくと背筋をかける快感が止まらない。

「こんなっ♡　なんで……」

身体中をさすられるだけでとろとろに溶けてしまうなんて初めてだ。推しの手だからなんだろうか。このあともつと気持ちいいところを触られると思うと、やっぱり今日死んでしまうんじゃないかと心配になってくる。

ブラの上からおっぱいをやわやわ揉まれ、カップの中で乳首がきゅんと持ち上がった。その気持ちいいところ、摘んでくりくりしてほしい……けれどその先端は触ってもらえずに、憂理の手はまた私のお腹に降りていってしまう。反対の手も太ももの付け根にもすりすりと触れているが、熱を持っている割れ目の真ん中には一切触ってくれない。

焦らされている間も、唇にはずっとキスが送られ続けていて、蕩けるようなキスが気持ちよすぎる。舌の先端で唇をちろちろ♡されたり、唇同士を合わせてちゅぱちゅぱ♡と吸われたり、巧みなキスにどんどん昂っていく。

それなのに肝心なところは焦らされていて、もうどうしたらいいのか分からない

かった。

「あ……♡ はあ♡ あ……っ」

「はは、まだどこも触つてないのに、こんなにとろけてて大丈夫？」

唇を離されて、涙目で憂理を見るといたずらっぽく笑っている。顔にいくつかあるセクシーなほくろと、ちらりと見えた犬歯が相まって、好きすぎる顔だと改めて実感した。

（顔面国宝にいじわるされている……）

もはや顔を見るだけで、きゅん♡と愛液が漏れていくような気がする。もっといろんなところを触ってほしいと男の人にねだりたくなるのなんて初めてだった。その対象が推しなんて贅沢すぎる。

「だいぶ焦れてんだろ」

憂理は赤らんでいる舌をちらりと出して、私の鎖骨を舐めた。ぬろつと濡れた

感触に肌が粟立つ。その舌でもっと敏感なところを舐めてほしくて、また身体がきゅんきゅん疼いた。

「どこ触ってほしいか言ってみろよ」

「え……っ」

グレーの強い視線が私を射止める。部屋の薄暗い照明で影を作っている長いまつげ。夢みたいだけど夢じゃないんだと実感する。口にするのは恥ずかしいのに、憂理の人差し指が、ツー、とブラのラインをたどっていくので我慢できなかった。そこの、先っぽに、ほしい。

「ち、乳首……、触って、ほしい」

自分で言って、カアと顔が赤くなる。推しの前でこんなことを言ってしまうなんて信じられない。はしたないと思われたらどうしよう。しかし憂理は嬉しそうに口角をあげて、目を細めた。

「よくできました」

頭を撫でたあと、背中でホックを外されて、ぷるんとおっぱいが飛び出る。憂理の視線がじつとそこへ降り注いでいる気がして、隠したくなった。大きくも綺麗でもない平凡な胸だ。推しに見せられるようなものじゃ――

しかし私の手が動くより先に、主張している蕾を指先できゅ♡と捻られてしまう。びりびり♡と快感が腰に駆け抜けて、思わずのけぞった。

「あぁ♡♡」

「あーあ。ここ、ビンビンに立ってるじゃん」

憂理は親指と人差し指でコリコリ♡と捻り上げて乳頭を刺激してくる。待ちわびていた快感に身体中が喜んで、きゅん♡きゅん♡とおまんこがひくつく。

「あ……っ♡ あっ♡」

今度は人差し指でピン♡と両方の乳首を弾かれて、強い刺激に首を振った。

(きもちい……っ♡ 乳首ぴんぴんきもちい……っ)

いじめられるたびに、股から蜜があふれ出しているのが分かる。乳首の奥がまんこと直接繋がってるみたい、きゅん♡きゅん♡と連動している。

「ふ、気持ちよさそうな顔」

憂理は小さく笑って、今度は爪で乳頭をぎゅうう♡と潰した。そして、乳輪に埋めた乳首をカリカリ♡と強めに引っ掻いてくる。

「んうっ……!♡ ぐっッ♡」

カリカリカリカリ♡と爪で引っかき、また尖って主張を始めたところを摘まんで、クリクリクリクリ♡と捻る。カリカリカリカリ♡クリクリクリクリ♡と虐められて、腰をくねらせてしまう。

(乳首だけで、こんなに感じるなんて……おまんこ、切ない……っ♡)

快感で下半身がどんどん疼き、今度は性器を触って欲しくて仕方がない。ナカ

が、ひくひく♡きゅんきゅん♡と疼いていて、既におちんちんを挿れてほしいくらいだった。

「ん♡ んぅ……っ♡ ぐん、乳首、もう……っ♡」

喘ぎすぎてだらしなく口を開いたまま、つい、視線で憂理の下半身を追ってしまった。服の上からでも、スウェット生地ของズボンを性器が押し上げているのが分かる。その張った布地を見て、恍惚とした。

（憂理が、私で興奮してくれてる……っ♡）

私を触ってるだけで、憂理のソコを刺激したわけではないのに、勃起してくれている。嬉しすぎて、ますますお腹の奥がきゅんきゅんした。

「どこ見てんの？ エッチ」

私の視線はバレていたようで、憂理は恥ずかしそうに眉を寄せた。そのまま、勃起したモノをショーツ越しに押し付けてくる。ごりっ♡と固いおちんぽの感触

をお股で感じて、刺激に思わず目を閉じた。

「あ……っ♡」

「まだあげないから」

そう言いつつも、ぐり♡ぐり♡とおちんぼでクロッチを擦ってくるので、硬いモノが淫芽に当たる。ついクリトリスを押し付けるように腰が動いて、へこへこ♡とオナニーするみたいに腰を擦り付けてしまった。シヨーツの下でくちゅ♡くちゅ♡と愛液が泡立つ。

（これが憂理のおちんぼの感触……♡ ああダメ、オタクとしてはこんなの絶対ダメだ……！ でも欲しい♡ 推しのおちんぼ欲しい……っ♡）

かろうじて理性の葛藤があるものの、本能がもうどろどろに溶けてしまっている。その固い熱を今すぐ挿れて欲しい。おまんこに推しちんぼぶち込まれたい♡

「ふ、エロい顔してんなあ……でも、まだお預け」

欲しくて欲しくて涙目になっているのに、憂理は押し付けていた腰を離してしまつた。

代わりに手が降りてきてショーツをまさぐる。隙間から指を差し入れられると、ぬるお♡と愛液がまとわりついたのが理解つた。

「うわ、濡れすぎ」

憂理は笑つて、指を入口にこすりつける。ぷちゅっ♡と媚肉を割られて「あつ♡」と甘い声が出た。そのまま蜜を掻き出すようにして、くちゅ♡くちゅ♡とクリトリスに塗りたいくらい、直接的な快感に背中が仰け反る。

「ふああっ♡　そ、そこ、ヤ……っ♡」

「やじゃねーだろ、こんなに固くしといて」

憂理はショーツを引き抜いて、私の足を割り開いた。とろお♡と体液がお尻を濡らしていく。

また推しの視線が注がれているのを感じて、脚を閉じたかったが憂理の方が早かった。脚の間に身体を滑り込ませられると、もうどうしようもない。

ぬる♡ぬる♡と愛液を纏った憂理の指先がクリを回し撫でる。優しすぎるくらい
の刺激に、気持ち良さと物足りなさで膣の入り口がひくひくと収縮した。

「ああ……っ♡」

「ハハ、顔エツロ。どろどろじゃん」

私は今どんな顔をしているんだろう。推しに見せて大丈夫な表情なのだろうか。全くわからないが憂理は嬉しそうだった。顔が近づいてきて、ちゅ♡と恋人みたいな甘いキスを落とされる。こんなに甘く愛撫されていると推しに愛されているのではないかと勘違いしそうになる。

軽いフレンチキスをしながら、クリへの刺激はどんどん速くなっていった。ぬるぬるぬるぬる♡と先端を小刻みに揺らされて、腰の奥が痙攣する。優しすぎて

イけるほどではない、もどかしい快感が溜まる。

「んあ♡ んうっ♡ ああ、や……っ、ふ、んぐう♡」

キスの名残でよだれが顎を伝う。だらしなく口を開いて呼吸していると、憂理は私の身体を降りていった。

えっと思う暇もなく、乳首をぢゅうう♡と強く吸われ、大きな声が出てしまう。

「ああ、あっ♡」

「ふ、かーわいい♡」

かわいい!? 信じられない言葉が聞こえて、目を見開いた。推しに可愛いと言われる日が来るなんて。

しかし今見せているのはおめかしした姿ではなく痴態だ。身体中ひくひくさせて、腰を揺すっているなんて恥ずかしすぎる。

「もっと可愛いとこ見せろよ」

「ひう……っ！♡」

舌と指で両方の乳首をなぶられ、反対の指でクリトリスをいじられる。乳頭を甘噛みされて、舌の先でちろちろ♡舐められると電流が身体を伝い、その刺激を傍受するかのよう、クリをカリカリカリ♡と引つかかれる。

上と下、両方の刺激を逃がすかのようにかぶりを振ったが、限界が近づいてくる。ぎゅう♡とつま先が丸まり、快感に任せて胸を突き出し、腰をへこへこ♡させてしまう。

「あ♡ ひぁ♡ あ♡ やだ、しゅご……っ♡ イく、イ……っ♡」

「まだだめ」

「……っ!？」

完全にイきそうだったのに、憂理はピタリと手と口を止めてしまった。イきそびれたおまんこが、きゅううっとな切なく絞られる。